

## 海を照らす灯台のなかまたち (16)

～八幡浜港長早防波堤南灯台～

(やわたはまこうながはやぼうはていみなみとうだい)

県道、八幡浜～保内線を労働金庫前から向灘方面を保内に向かって行くと、須田トンネルの手前、八大龍王神社のすぐ近くに長早防波堤南灯台がある。



八幡浜～別府・八幡浜～臼杵のフェリーの航路が目の前を通るこの灯台は、八幡浜港を出入りする船舶の重要な目印です。

もう少し行くと陸地から海上へ300メートルも伸びた「おさかな牧場・シーロード」もあり、海上散歩、釣りも楽しめます。



港町八幡浜、町にはいつも海からの風が吹いている。

その昔、小さな入江に過ぎなかったが明治になってから、大阪、九州方面の貿易中継地として栄え、「伊豫の大阪」と呼ばれた。

そんな頃、この町に凧づくりが得意な一人の少年がいて、名を「二宮 忠八」といった。

彼の作る凧が良く上がることから評判を呼び、一時期それで暮らしを立てていたこともあった。

新しい時代の到来と夢を膨らませる少年がいつしか、大空に夢を抱いても不思議はなかった。

その発端は、カラスが餌をついばむ様子を見て、飛行原理を発見、明治 24 年鳥型模型飛行器をつくり、その飛行実験に成功、その後、彼は有人機のひな型となる「玉虫型模型飛行器」を作ったが、問題はその動力だった。

独力での開発には限界を感じ、軍に上申したが取り上げられず、独学でエンジンの開発に努力を重ねたが、1903 年ライト兄弟が有人飛行実験に成功したことを知ると、忠八は男泣きに泣き、その研究を断念した。

やがて日本にも航空機時代が訪れ、飛躍的に進歩していくなかで

忠八の功績は埋もれていったが、ある飛行家がそれを掘り起こしたことから、忠八は、航空機界の先覚者として知られるようになった。

「鳥型模型飛行器」の実験に成功した4月29日には、手作り飛行機の滞空時間を競う「二宮忠八翁飛行記念大会」が毎年開催され、飛行機の父と呼ばれる忠八を偲んでいる。

八幡浜には、このようなパイオニア精神を育てる気風があるのだろうか。

#### ○八幡浜港長早防波堤南灯台要項

所在地 愛媛県八幡浜市（八幡浜港長早防波堤南端）

塗色・構造 白色、塔形

灯 質 単明暗緑光 明3秒暗1秒

光達距離 5.5海里（約10km）

高 さ 地上から構造物の頂部まで 8.2m

平均水面上から灯火まで 12.0m

地上から灯火まで 8.1m

点灯年月日 平成元年12月19日

★「大八車」No.230（令和3年3月10日発行）掲載分

○八幡浜港長早防波堤南灯台及び周辺





灯室内



LED 灯器



太陽電池パネル